

巨樹・巨木シリーズ-4

細田木材工業株式会社
顧問 細田 安治

銀杏にまつわる2つの話

1. 神宮外苑銀杏並木伐採騒動

さて先月東京都の巨樹・巨木調査で判ったことは、都内には銀杏が多いことだ。一般的で誰でも知っている銀杏と言えば、明治神宮外苑の銀杏並木だ。この銀杏並木が、球場スタジアムの老朽化による建替えに伴う外苑一帯の再開発計画により、有名な銀杏並木も一部を「移植」または「伐採する」と伝えられている。

歴史と伝統ある神宮外苑の銀杏並木は、季節の変わり目ごとに美しさを見せてくれる。特に秋の紅葉？銀杏は黄葉、いや待てよ、金葉と言うか黄金色に染まる素晴らしさは「日本一」と言っても過言ではない。と信じている。銀杏が落葉した足元の、黄金の絨毯を敷き詰めたような美しさには、「大自然の偉大な力」を実感する次第である。更には、銀杏の木は人々に愛され親しまれ、また神社の古木は神木として人々の信仰心の対象となっている素晴らしい樹だ。いかがでございましょうか。

・銀杏を残せ

「なぜ銀杏を動かすのか、倒すのか」「銀杏並木を残せ」と周辺の住民はもとよりの事、日本全国からも「銀杏並木を残せ」との声が上がったが、この自然保護派の声も、開発側の神宮球場の安全性と、それに伴う開発重視の方針に、「環境を残せ」の声も届かず一部の移植、伐採が決定されたようだ。

・老齢銀杏の移植など聞いたことがない

ここで移植と言うが、年老いた銀杏の老齢樹を移植する、など聞いたことがない「奇想天外」なことだ。移植は成功しないだろう。多分移植失敗で枯れてしまうのではと、半ば確信している。言いたいことは、移植と言うが実質は伐採と同じと思う次第だ。

・明治神宮外苑の森とは

そもそも、明治神宮外苑が作られたのはおよそ100年前。全国の篤志家からの寄付によって、さまざまな地域から樹木が運ばれ大勢の勤労奉仕によりつくられた人工の森である。そして100年かけて育てられた緑の森は、都民に親しまれ愛され都心に広がる貴重な緑となる。

秋には黄色に色づく名所の銀杏並木など、憩いの場として親しまれてきた。ここでやっと銀杏が出てきたぞ。ここでも銀杏は如何に、貴重であり注目されていることが解る。近くには東京オリンピック・パラリンピックの時期にあわせて、新しい国立競技場も建設された。神宮球場や秩父宮ラグビー場もあり、スポーツの拠点としても知られている。

・再開発計画

その明治神宮外苑の再開発の計画が公表されたのは2015(平成27)年。球場とラグビー場は位置を入れ替えてそれぞれ建て替え、商業施設などが入る2棟の複合ビルが新たに建設される

再開発に伴い、事業者は743本の樹木を伐採するとしている。

「エーホントかよ」こんなに多くの樹を倒すのか。言語同断の話だ。

一方で銀杏並木を保全する計画は、都の審議会が銀杏並木への影響調査が不十分と指摘された。当然のこと。しっかりした保全計画を作って欲しい。

- 開発事業認可

東京都は明治神宮外苑の再開発事業を認可し、現在ある施設の解体工事を始めている。また、球場近くの樹木が立ち並ぶ一帯でも、樹木を移植するための作業が始まっている。

新しい建物の建設工事は再来年度から始まり、全体の整備は2036(平成18)年に完了する計画で、総事業費はおよそ巨額の3490億円だということである。

- ユネスコ、銀杏が枯れると心配

再開発を巡っては、文化財の保護に取り組むユネスコの日本国内の諮問機関「日本イコモス国内委員会」が、計画どおりの場所に新しい神宮球場が建てられれば、名所の銀杏並木が枯れるなどとして、懸念を示している。

事業者は、銀杏並木を保全するとしているが、これまで都の審議会では、影響調査が不十分と指摘されていて、今年の春以降、改めて審議される予定としているが、こちらも報道なく闇の中である。

- 専門家5人 撤回を求め要望書を提出

東京都が明治神宮外苑の再開発事業を認可したことを受けて、樹木や都市計画などの専門家5人が撤回を求めて都に要望書を提出した。

要望書では、「再開発事業では都民や専門家の十分な参加を保障する行政手続きが進められていない。突然の施工認可は到底許されない」としている。

2. 銀杏とは

銀杏について改めて調べてみる。漢名(異名)の「公孫樹」は長寿の木であり、祖父(公)が植えると孫が実(厳密には種子)を食べることができるという伝承に基づいている。長い年月を経なければ一人前の樹にはなれない。としている。

銀杏は、火災に強く神社仏閣の境内に植えられ、風雪に耐えて生き残る生命力の強さを現している。

- 裸子植物

素人目には、木材の主な使い道とは、建築用だけと、つまり家を建てる時しか使われない。

だから「銀杏は木じゃない」とよく言われたものだ。なるほど、言われてみれば、学問的には裸子植物で落葉性の高木である。黄葉時の美しさ



明治神宮外苑の銀杏並木



日本最大の大銀杏(青森県深浦町の北金ヶ沢)

と剪定に強いことから、明治神宮外苑や大阪御堂筋などの銀杏並木が特に有名である。日本では街路樹や公園樹として観賞用に、また寺院や神社の境内に多く植えられ、食用、漢方、材用としても栽培されているが、保全状況は危機 Encyclopedia of Life と称されている。学名 *Ginkgo biloba* ネットウィキペディアより資料参照

- 銀杏日本一

日本最大の大銀杏は青森県深浦町の北金ヶ沢にある樹齢千年以上、幹回り22メートル高さ40メートルの巨木である。古くからご神木として崇拝されており、幹から垂れ下がった乳房に似た形をしている気根に触れると、母乳の出が良くなると言い伝えられていることから、「垂入根の公孫樹(たらちねのいちょう)」とも呼ばれている。北海道や秋田から乳飲み子を抱える女性が願掛けに訪れて、米やお神酒を気根に供えてお祈りするという風習があったと言われている。

- 鎌倉鶴岡八幡宮大銀杏の再生

神奈川県鎌倉市鶴岡八幡宮の大銀杏は、2010年(平成22)3月10日未明に倒れたがすぐさま再生への取り組みがなされた。もともと植わっていた場所には、樹根が腐らないような処置が施され、残った根から「ひこばえ」が出てくるよう処置が施された。約1年後の2月20日に幹の部分から新たな「ひこばえ」2本が確認され、そして嬉しいことに、その芽が大きく成長し今日の銀杏の幼木姿となっている。

- 「木材や」からみた銀杏

さて、そこで「木材や」として、気になる銀杏の使い方である。筆者は若い頃銘木市場に出入りしていた折、銀杏について先輩に教わったことを思い出した。銘木屋仲間の先輩たちによれば、銀杏は「碁盤」と「俎板」。銀杏で当てれば一財産築ける。但し乾燥には何年もかかる。大変



鶴岡八幡宮の歴史を刻んで倒れてしまった老木



12年後の「ひこばえ」が再生した銀杏

な作業だ。丸太のまま放置するか。盤にしてから乾燥するか。原木では数十年かかるので矢張り大割りに製材した盤が正解だと思う。ここから乾燥が始まるわけだが、いい加減な乾燥で盤にすると、すぐに狂ったり、割れたりで使い物にならなくなる。含水率計は盤が大きいので機能せず、あくまでも人間の眼でみての判断になる。この見極めが腕の見せ所。当時、銘木屋仲間でも銀杏は難しい木とされ、扱う人は限られていた。「銀杏は・・・さん」と言われており、その道の名人達人でなければ手を付けることのできない銘木、いや神木であった。素人が手を出せば、それこそ神罰観面として大ヤケドし、果ては財産を失うことになるであろう。そこまで覚悟しなければ手を出せない神木であった。今でもそうであろう。続く

ドラッカー言葉-5

マネジメントの仕事

企業のマネジメントは経済的成果を上げることによるのみ、その存在と権威が正当化される。

- 第一の機能⇒事業をマネジメントすること、創造的な活動としてのマネジメント
- 第二の機能⇒人的資源を使って生産的な企業を作ること。経営管理者をマネジメントすること
- 第三の機能⇒人と仕事をマネジメントすること
- 第四の次元⇒現代と未来のマネジメント、時間軸のマネジメント

◇これらそれぞれの仕事をマネジメントする多目的な機関

我々企業に置き換えれば、四方八方目配りし、過去を土台として、今を確認し、未来を見据えよ。

「現代の経営」第二章より